

死亡の予測因子としての反応時間：放射線影響研究所成人健康調査[§]

Reaction Time as a Predictor of Mortality: The Radiation Effects Research Foundation Adult Health Study

山田美智子 清水昌毅 笠置文善 佐々木英夫

要約

目的 原爆被爆者とその対照から成る中年期から老年期の集団において、反応時間(RT)と死亡率の30年にわたる関連を調査した。

方法 広島成人健康調査コホートの4,912人について1970-72年に反応時間を含む生理的機能測定が行われ、2003年末まで死亡が追跡された。

結果 多変量調整モデルでRTの1標準偏差当たりの死亡ハザード比は、男性で1.08(95%信頼区間[CI] = 1.03-1.13)、女性で1.22(95%CI = 1.16-1.28)、全体で1.13(95%CI = 1.09-1.16)であった。性・年齢群ならびに追跡期間群に区分して解析した場合にも、RT増加に伴う一貫した死亡率増加が観察された。すべての性・年齢群でRTの五分位の最高位における死亡率のハザード比は、五分位の最下位に比べ有意に高かった。死亡率とRTの有意な正の関係は20年後以降の追跡でも観察された(男性 $p = 0.03$ 、女性 $p < 0.001$)。RTと被曝放射線量は、喫煙、血圧高値、糖尿病などの従来のリスク因子とは独立した死亡のリスク因子であった。RTと放射線量の相互作用は男性の死亡率では認められなかった。女性では単位RT当たりのハザード比は放射線量の増加に伴って減少したが、RTと放射線量は依然として有意な死亡の予測因子であった。

結論 RTは一貫して死亡の強い予測因子であった。放射線量の増加に伴って死亡率は増加したが、放射線がRTと死亡の関係を促進することはなかった。

(放影研注) ここで述べられている「死亡」は「全内因死(病気による死亡)」を意味します。

[§] 本報告書は *Psychosom Med* 2013 (February-March); 75(2):154-60 (doi: 10.1097/PSY.0b013e3182822b4a) に掲載されたものであり、その正文は同掲載論文のテキスト(英文)である。この日本語要約は、日本の読者の便宜のために放影研が Wolters Kluwer Health Medical Research の許可を得て作成したが、本報告書を引用し、またはその他の方法で使用するときは、同掲載論文のテキスト(英文)によるべきである。